

APT相場は需要低調も供給面から上振れの可能性

タングステンの中間原料・APTの国際相場（バラタングステン酸アンモニウム、ヨーロッパ・アメリカ）は、24年6月に350ドル/Mtu近くまで上昇した後やや調整に転じたものの、足元で333ドルと依然高値を維持している。一方、需要面では、主用途の超硬工具が中国経済の低迷や自動車の不振で伸び悩み、回復の見通しが立たない状況が続いている。タングステンの中間原料・合金鉄・スクラップを長らく取り扱ってきたNIC Resourcesの**西野元樹社長**に今年1~3月の相場見通しを寄稿してもらった。

APT相場は需要低迷も\$300台の高値推移続く

タングステンの中間原料であるAPT国際相場（CIFロッテルダム/バルティモア）は24年6月に、18年6月、22年4月のピーク時に並ぶ335~360ドル/Mtuまで上昇した。7月に入ると下落に転じたが、7月末の320~340ドルを底にその後も堅調に推移し、足元でも320~345ドルと高値圏を維持している。新型コロナウイルス感染拡大により、20年7月までAPT国際相場は200ドル前後で低迷していた。だが、コロナ禍からの需要回復や在庫積み増しによる原料購入量の増加を背景に相場は上昇。22年4月には約4年ぶりに350ドルを回復した。その後の2年間は緩やかな軟化が続いたが、24年4月末から急激な上昇に転じた。

中国内相場は精鉱・APT安値販売せず高値を維持

これらの動きの背景には、タングステン精鉱供給の8割を占める中国内での精鉱相場の動きがある。環境査察による精鉱生産の落ち込みから、24年4月末に精鉱相場が急騰。年初は12万元/t前後だったが、5月中旬には15.7万元まで上昇した。6月初旬に環境査察が終了し供給が回復すると、7月末には13万元を下回る水準まで下落したが、その後は持ち直し、足元で14.4万元（ドル/Mtu換算で約302ドル）と引き続き高値で推移している。

中国のタングステン精鉱生産は大手鉱山に集約されており、各鉱山とも精鉱相場の高値維持を優先し安値売りはしていない。精鉱を原料とする中国内のAPT相場も足元21.1万元/t（ドル/Mtu換算で325ドル）と高値で推移している。

中国のタングステン需要は好調とは言えないものの、1月末から2月初旬に旧正月があり、1~3月の精鉱生産量が減少、24年同様に精鉱相場の上昇も見込まれ、中国内相場は供給面を中心に今後も堅調に推移すると思われる。

西側はスクラップのタイト感からAPT購入に転換も

一方、西側諸国のタングステン需要も回復の兆しは見えないものの、日本やヨーロッパ、アメリカの主要需要家の精鉱およびリサイクル原料となるスクラップ需要は強い。超硬工具の需要低迷により発生量も落ち込んでいるスクラップのタイト感が大きく、相場は高騰している。そのため、スクラップをリサイクルした場合のコストがAPT国際相場を超える水準になりつつあり、スクラップリサイクルからAPTのスポット購入に需要が移ることも起こり得ると考える。

米中の貿易摩擦の激化でW原料のタイト感拡大

最後に1月20日に就任するトランプ新大統領の影響については、アメリカ・中国間で相互に輸出禁止措置を取り合うような事態になれば、さらに日本やヨーロッパ、アメリカでの精鉱・スクラップのタイト感が拡大する可能性がある。

アメリカの中国からのタングステン原料輸入はすでにかなり縮小しており、YTO/BTOは年間100tに満たないが、APTでは約1,000t、W粉およびWC粉はそれぞれ500t前後あり、年間約2,000tのタングステン原料を中国から輸入している。この数量を西側精鉱・スクラップの活用で賄うことになれば影響は大きい。

トランプ大統領1期目の19年にはアメリカ・中国間の貿易戦争により、日本を含めた米中以外の地域も需要が落ち込むことになったが、貿易摩擦による需要悪化は発生するとしても今年1~3月以降になると思われ、同時期に限れば供給面でのタイト化など相場の上振れ要因になると考える。

今年1~3月のAPT国際相場は引き続き中国を中心とした供給面の要因から高値圏で推移していくが、精鉱・スクラップのタイト感からAPTのスポット需要が増えれば国際相場が上振れする可能性もあることから、325~360ドルで推移すると予想する。